

2010年度

コレクション

「君に薦める一冊の本」



大阪工業大学図書館

先生方より、学生の皆さんへ
「これは是非、読んでもらいたい！」と思う本を、
2010年も推薦していただきました。
勉強やクラブ・サークル活動などで忙しい日々の合間に、
一度手にとってみてください。

カズオ イシグロ著 土屋政雄訳 『日の名残り』 早川書房 2001年
933.7//I 91011283 (大宮本館所蔵)
080//H 98100290 (枚方分館所蔵)

人生の中で決断を自らしていくことの重要性和、それが容易でないことを知らせてくれる人生の書。日本と同様階級社会の英国における貴族に仕える執事の人生のありようを第1次世界大戦後の英国社会での社会変化の中で描いたもの。奥の深い物語。著者は日本人であり、階級社会の文化も承知している。本書は、英国で最も権威ある長編小説に与えられるブッカー賞を受賞している。映画化もされたので、映画とともに味わうのは意義がある。
(知的財産学部知的財産学科 田浪一雄先生 推薦)

野口悠紀雄著 『「超」文章法』 中央公論新社 2002年
816//N 91021475 (大宮本館所蔵)
081//C//1662 98100303 (枚方分館所蔵)

物理学者キャベンディッシュは「地球の重さを測る」という論文を発表した。「重力定数 g の測定」ではないのだ。本書ではメッセージが八割の重要性をもつと言っている。つまり伝えたいことが明確でなければ、卒論は80点ということになる。これは一読に値する。
(情報科学部コンピュータ科学科 小島正典先生 推薦)

清宮克幸著 『最強のコーチング』 講談社 2006年
783.48//K 91101159 (大宮本館所蔵)
783.48//K 98100289 (枚方分館所蔵)

早稲田大学ラグビー蹴球部ならびにラグビートップリーグのサントリー・サンゴリアスの監督を歴任した著者の「熱い思い」が語られています。彼のコーチング哲学は Ultimate Crush (=完全なる勝利) というスローガンに凝縮されていると言って過言ではありません。社会に出る前に読むべき！ 元氣と勇氣が湧いてきます。
(工学部応用化学科 益山新樹先生 推薦)

アンリ・ポアンカレ著 河野伊三郎訳 『科学と仮説』 岩波書店 1959年

080//I 00131346 (大宮本館所蔵)
080//I 98100388 (枚方分館所蔵)

超一流の数学者が数学、物理の根底にある公理、仮説について卓抜した分析・考察を行っている。

(工学部技術マネジメント学科 志垣一郎先生 推薦)

鎌田東二著 『超訳 古事記』 ミシマ社 2009年

913.2//K 91101388 (大宮本館所蔵)
913.2//K 81000474 (枚方分館所蔵)

生死、病死、愛憎などが宿る日本誕生の神話を知ることができる。

(工学部環境工学科 吉岡尚也先生 推薦)

藤沢周平著 『たそがれ清兵衛』 新潮社 2002年

913.6//F 10205230 (大宮本館所蔵)
080//S 98020900・98050598 (枚方分館所蔵)

藤沢周平の著作の中で、最も楽しい作品集です。
私がこれまでに読んだ中で、最も楽しい一冊です。

(工学部空間デザイン学科 山形一彰先生 推薦)

島村菜津著 『スローフードな人生！イタリアの食卓から始まる』 新潮社 2003年

080//S 98100389 (枚方分館所蔵)

物事に対峙する態度を表す言葉には、「食べる」事に関するものが多くあります。例えば「噛み砕いて説明する」「飲み込みが悪い」「咀嚼する」「嚥呑みにする」「吸収する」「思いを吐き出す」などがそれにあたります。ものを食べることは、物事に向き合う態度と密接な関係があるんですね。

あなたはおいしいものを食べていますか？食べるのが楽しいですか？知的好奇心は健在ですか？何かおなかが満足する話はないかな、と思っている方、この本を読んでみてください。もっと世の中のこと、人のことや自分のことなど、さまざまなことを知りたくなるのではないのでしょうか。

(知的財産学部知的財産学科 大谷真弓先生 推薦)

養老孟司著 『自分の頭と身体で考える』 PHP 研究所 2002 年

304//Y 91091605 (大宮本館所蔵)

080//P 98101583 (枚方分館所蔵)

人との出会いによって、人生が変わったという経験は今までにありましたか。人のご縁とは不思議なもので、人生のある時期に、あるタイミングで、ある状況の下で、その人にとって必要な出会いが起こると私は思っています。そうした出会いは、偶然に起こったように見えて、実はそれまでに考えてきたことや経験してきたこと、作り上げてきた環境等によって、そうなるべくしてなるものです。逆に、いくら素晴らしい人に出会ったとしても、自分自身の受信体勢が整っていなかったり、タイミングや状況が合っていなかったならば、その出会いは自分の中に新たなものを生み出すような心躍るものとはなりません。本もまた同じだと思います。その本自体の持っている価値とは別に、いつ、どのような状況で、どんな本に出会ったのか、ということは「その本を読んだ体験」の価値を左右する大きな要因となります。

今回ご紹介する「自分の頭と身体で考える」は、解剖学者と古武術研究者との対談です。対談ですので、読者も共に考えながら読み進めることができます。この本を読むと、私たちが当然のように思い込んでいることに対して、改めて光が当てられる感じがするかもしれません。題名通り、「自分で考える」とはどういうことかが理解できると思います。「自分で考える」のですから、本の内容をそのまま丸呑みするのではなく、あれやこれやと思いつく巡らせながら読んで下さればよいと思います。この本を読んでみて、それをどう自分で咀嚼するのか、この本との出会いをいかに自分の人生の中に組み込むのかは、読む人次第です。

さて、あなたはこの本を読んで何を考えるでしょうか。後は皆さんにお任せします。

(知的財産学部知的財産学科 大谷真弓先生 推薦)

志賀直哉著 『清兵衛と瓢箪・網走まで』 新潮社 1999 年

913.6//S 91102262 (大宮本館所蔵)

志賀直哉の短編集である。書名に使われている「清兵衛と瓢箪」を紹介したい。「これは清兵衛と云う子供と瓢箪との話である。」という書き出しで始まる、僅か7ページの短編小説である。清兵衛は瓢箪に凝っていて、自分で作ったり、町中の瓢箪を見て回ったりしている。周りの凡庸な大人達は、全く分からないのであるが、清兵衛には、本当に美しい瓢箪は、どのような瓢箪かが分かっている。ある日、道ばたの出店で良い瓢箪を見つけて買う。この瓢箪をこっそりと授業時間中に磨いているところを教員に見つかって取り上げられてしまう。

志賀直哉の文章は、簡潔で美しい。こころの動きを適切に捉え、その中に読者をいざなう。短い小説ではあるが、味わい深い。

志賀直哉と芥川龍之介が私の読書の原点である。ここから多くのものを得たと思う。一つを挙げれば、さまざまな場面における人間の心の動きについて学んだ。人間に対する時に、相手の心の動きを捉えることが重要なケースは多々ある。優しい人は、傷ついている人の悲しい気持ちを自分の事のように捉えられる人であろう。

読書は、感動が無ければ長続きしない。読書の習慣が無い人に、そのきっかけを作る一冊であればと思う。

(工学部空間デザイン学科 山形一彰先生 推薦)

◇ 図書は大宮キャンパス、枚方キャンパスとも、図書館の「君に薦める一冊の本」コーナーにあります。